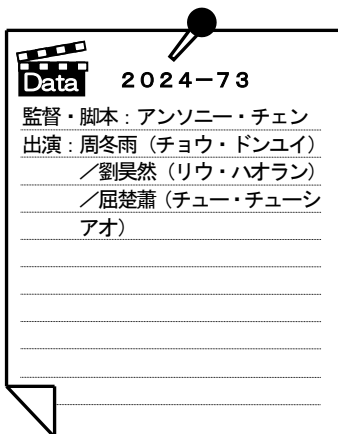




みどころ

邦題はロマンチックだが、原題は『燃冬』、英題は『The Breaking Ice』だから、とにかく寒そう。本作では、何よりも吉林省延辺朝鮮族自治州の首都、延吉という、舞台設定に注目！

他方、本作の主人公は男女3人の若者だが、各自の「躺平（タンピン）主義」に注目！若者が挫折し、将来に希望を持ってないのは日中韓の三国に共通だが、“ある偶然”によって生まれた“国境ナイトクルージング”に見る、三者三様の「躺平（タンピン）主義」とは？

なお、本作ラストでは、金日成將軍サマが神様の形象の如く大活躍する姿を今日まで伝える、“白頭山伝説集”の舞台となる、長白山と天池の絶景が登場するので、それにも注目！

■なぜこんなテーマに？それは“衝撃と奔放さ”から！■

私は観ていないが、本作は、『イロイロぬくもりの記憶』（13年）で第66回カンヌ国際映画祭カメラドール賞を受賞したシンガポール出身のアンソニー・チェン監督が、パンデミックの2年間、家に引きこもっていた中で存在意義を失いかけて、映画作りへの渴望を抑えられずにいる中、“衝動と奔放さ”から生まれた作品らしい。

そのことはパンフレットにある監督メッセージとインタビューの中で詳しく語られているが、本作で彼がテーマとしたのは、次のとおりだ。すなわち、「これまでやってきた方法を捨て去り、慣れ切った環境から脱するため、見知らぬ国や地形、気候の中へと自分を置く事にしました。そんな中で、最近話題として目にする事の多かった中国の若者たち、その魂を映画として収めたかったのです。」そこで同監督が注目したのは、「急激な経済発展の中で経済格差は広がり、終わりのない競争社会に疲れた中国の若者たちが、将来を悲

観し閉塞感に身を沈めている。行き場のない彼らを異国人の目で」見つめている現実だ。

ちなみに、あなたは中国語の「躺平（タンピン）主義」なる言葉を知ってる？これはウィキペディアによれば、「中華人民共和国において、若者の一部が競争社会を忌避し、住宅購入などの高額消費、結婚・出産を諦めるライフスタイルであり、2021年4月にSNSで発表された『寝そべり主義だ』という文章が連載されて呼称が広まった。」と解説されている。この躺平主義は、「中国では厳しい受験戦争を勝ち抜いても、大学・大学院卒業者が増え続けていることもあって、条件が良い若者向け求人は少ない。こうした社会的圧力による、過労を強いる長時間労働（996 工作制：朝 9 時から夜 9 時まで週 6 日間勤務、すなわち、割に合わないラットレース）を拒否し、代わりに「寝そべって衝撃を乗り越える」、すなわち低欲望を選び、立身出世や物質主義に対して無関心の態度を取ることを選択した」という意味で、「抗議行動」の意味を持つから、非常に根深い社会問題だ。

しかして、シンガポール出身のアンソニー・チェン監督が、そんな問題意識の下で演出した本作の舞台は？また 3 人の主人公は？

■□■原題は『燃冬』、英題『The Breaking Ice』、舞台は延吉■□■

本作の邦題は『国境ナイトクルージング』とロマンチックなものにされているが、原題は『燃冬』、英題は『The Breaking Ice』だ。それを正確に翻訳するのは難しいが、雪と氷に覆われた厳しい冬の景色のイメージだけはハッキリしているから、邦題とは大違いだ。

他方、本作の舞台は、中国東北部にある吉林省延辺朝鮮族自治州の首都、延吉。ここは、北朝鮮との国境に近く、中国と朝鮮の文化が混ざり合う異色の都市だ。私は中国旅行に約 20 回出かけているが、中国東北地方への旅は大連、瀋陽のみで、それよりさらに北の長春まで行ったことがない。まして、それよりさらに延吉には行ったことがない。しかし、私はなぜか長春出身の漢族の女性や延吉出身の朝鮮族の女性と親しくなり、いろいろな情報を交換したことがあるので、とりわけ延吉という、大阪から見れば遥か遠くにある異国の都市はなぜか魅力的だった。したがって、そんな都市の観光ツアーに気楽に参加できるのなら、ぜひ参加したいと願っている。

そう思っていると、本作冒頭で、友人の結婚式のため延吉を訪れたハオフォン（リウ・ハオラン）がその翌日、観光ツアーの添乗員をしている女性ナナ（チョウ・ドンユイ）の案内によって典型的な延吉観光ツアーに出かけるので、それに注目！簡体字とハングルが隣り合う異国情緒豊かなネオンサインは夜の延吉の名物だが、本作にもそれがタツブリと収められているので、それに注目！このレベルの丸 1 日観光ツアーなら料金も安いはずだ。もっとも、その場合、食事は大したことがないし、土産店ばかりに送られるのは仕方ないが、本作導入部を見ているだけで、私もハオフォンとともに延吉の一日観光ツアーに参加したような気分になったことに感謝！

■□■3 人の主人公は三者三様の躺平（タンピン）主義者？■□■

本作の 3 人の主人公は、それぞれやり場のない寂しさに閉じ込められた若者たち、つま

り三者三様の躺平（タンピン）主義の若者だ。ハオフォンは、プレッシャーに心を壊したエリート社員。ナナは、オリンピック出場を断念した元フィギュアスケーター。そして、シャオは勉強が苦手で故郷を飛び出した料理人だ。

弁護士生活 50 周年を経験した私は、老人はもちろん若者だって、どこかに何らかの鬱屈を抱えているから、底抜けに明るい人間なんているはずはない、そんな心境になっている。現在、読売新聞では加山雄三の「[時代の証言者] 若大将の航跡 加山雄三」が連載されているが、高度経済成長時代の 1960 年代に大ヒットした彼の映画「若大将シリーズ」は、はっきり言って全てウソ。あんなにすべてがかっこよく、すべてがうまく収まるサクセスストーリーは、まさに娯楽映画なればこそ。そしてまだこまでも経済成長していくことを信じる昭和の映画なればこそこのシリーズだった。

それと対比すればより明確だが、躺平主義が横行している現在の中国では、せっかく友人の結婚式に参加するため冬の延吉にやってきた主人公ハオフォンの、何ともうっとうしい顔つきに納得！ どうか彼は、上海でエリート金融マンになったものの、終わらない競争に心を壊してしまったらしいが、映画の中ではそれは明確に語られないので、しっかりそれを付度する必要がある。また、観光ツアーの添乗員をしているナナは、工作中は明るく朗らかで、ツアー客への客当たりは最高。こんな美人の添乗員がいれば、安物の観光ツアーもさぞ楽しいことだろう。ところが、そんなナナが、スケート場で見せる表情を見ると、アレレ、アレレ……。どうか彼女は、オリンピック出場を有望視されながら、怪我のために夢を立たれたフィギュアスケーターで、その心中には痛手を負っていたらしい。3 人目のシャオは、現在、親戚の食堂で働いているが、彼が密かにナナを思っていることは、観客の目には明らかだ。

物語が動くのは、観光ツアーの最中にハオフォンが、不運にもスマホを紛失してしまったこと。そうなれば、現金など持ち合わせていない昨今の若者であるハオフォンが困り果てたのは当然だが、そこでナナが“助け舟”を出した上、ツアー終了後、ハオフォンを夜の延吉に連れ出し、男友達のシャオとともに飲み会をセットしたところから、本作は思わぬ展開を見せていく。シャオにしてみればいい迷惑だが、盛り上がった飲み会の後は、3 人でナナの家になだれ込み、さらに朝まで飲み明かしたから、アレレ、アレレ……。そこで驚いたのは、一見長い付き合いだと見えたナナとシャオとの関係が意外と疎遠で、なんとシャオがナナの部屋に入ったのは、今回が初めてらしいということ。こりゃ一体どうなっているの？ しかるに、ナナはなぜ、今回は 2 人とも自分の部屋に引きずり込んだ上に、朝まで飲んだの？ しかも、翌朝寝過ごしして上海に戻るフライトを逃し、途方に暮れているハオフォンに対して、ナナはさらなる助け舟を……。

私も大学時代や司法修習生時代に、数人の友人とともに、これと似たようなハチャメチャな体験をしたことがあるが、その時にも、各自それぞれ心の中に、何らかの葛藤を抱えていたことをはっきり覚えている。すると、躺平主義がはびこっている昨今、ハオフォン

とナナ、そしてシャオの 3 人の若者が持つ心の中のわだかまりの深刻さは、如何ばかり・・・？

■□■ 3 人の微妙な男女関係は？長白山と天池の風景は？ ■□■

神は、最初、アダム（男）とイブ（女）を、一人ずつ作ったのは、さすが。その後の人間社会も一夫多妻制はあったものの、基本的には一夫一婦制に収められていった。これは男と女からなる人間社会を、多分最も安定させる制度なのだろう。そのことは逆に言えば、男 1 人 vs 女 2 人であろうと、女 1 人 vs 男 2 人であろうと、「三角関係」は人間関係を不安定にさせる可能性が高いことを物語っている。そして、そうだからこそ、文学や映画の世界では古今東西、男女 3 人の「三角関係」が描かれるケースが多いわけだ。例えば、ハリウッド映画『戦争と平和』（56 年）の大テーマは「戦争と平和」だが、小テーマはピエールとアンドレイという 2 人の男と、オードリー・ヘプバーンが演じた 2 人の男性から慕われる女性、ナターシャという三者三様の人間関係＝「三角関係」だった。とりわけ若い時代の「三角関係」は、それぞれの男女が持つ動物的な性的衝動が激しいから、時に意外な、想定外の男女関係（肉体関係）が生まれ、それによって、あっと驚く意外な人生模様が展開していることがある。

1967（昭和 42）年 4 月に大阪大学に入学した私は、一方で学生運動に明け暮れる中、他方で大学や下宿でのさまざまな交友関係や男女関係を通じて、まさに“これぞ青春！”という人間模様を展開していた。もっとも、その当時の私の気持ちの中に本作の 3 人の主人公のような「躺平（タンピン）主義」は全くなく、人生における前向きな希望や、学生運動を通じた社会活動への意義づけ等が議論の対象であり、行動の指針になっていた。そんな私の 20 歳前後の時代の体験と対比すれば、本作で 3 人の男女が見せる“国境ナイトクルージング”は、多くの部分で共感するものの、三者三様の失意や諦め＝躺平（タンピン）主義の姿に、やはり違和感がある。そんな中で、ある意味で必然的に、ある意味で衝動的に生まれてしまう男女の肉体関係のあり方についても、しっかり注目したい。

他方、奥深い雪といえば、私は邦画の名作『八甲田山』（77 年）（『シネマ 55』266 頁）を思い出すが、本作後半に見る長白山と天池の風景はそれ以上の絶景と言えるかもしれない。「長白山」といえば、1930 年代の抗日戦争における北朝鮮のリーダー、金日成將軍サマが、神様の形象の如く大活躍する姿を今日まで伝える「白頭山伝説集」の舞台であり、朝鮮民族にとって神聖な伝説だ。しかし本作では、それとは全く別の、虎と熊にまつわる「長白山伝説」が語られ、長白山の頂上にある“天池”と呼ばれるカルデラ湖への 3 人の“国境ナイトクルージング”においては、何と本物の熊まで登場してくるので、それに注目！ちなみに、アンソニー・チェン監督は、パンフレットの「interview」の中で、中国絵画のようなモノクロな色調で、美の中に緊張感を映す景色をいかに演出したかについて詳しく語っているので、これは必読！

2024（令和 6）年 10 月 30 日記